

50393

教科書文庫

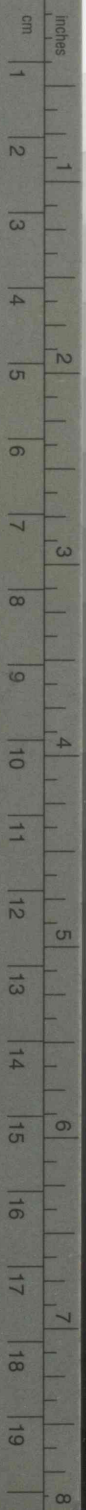
5
810
34-1948
0/304 49617

Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



Kodak Color Control Patches

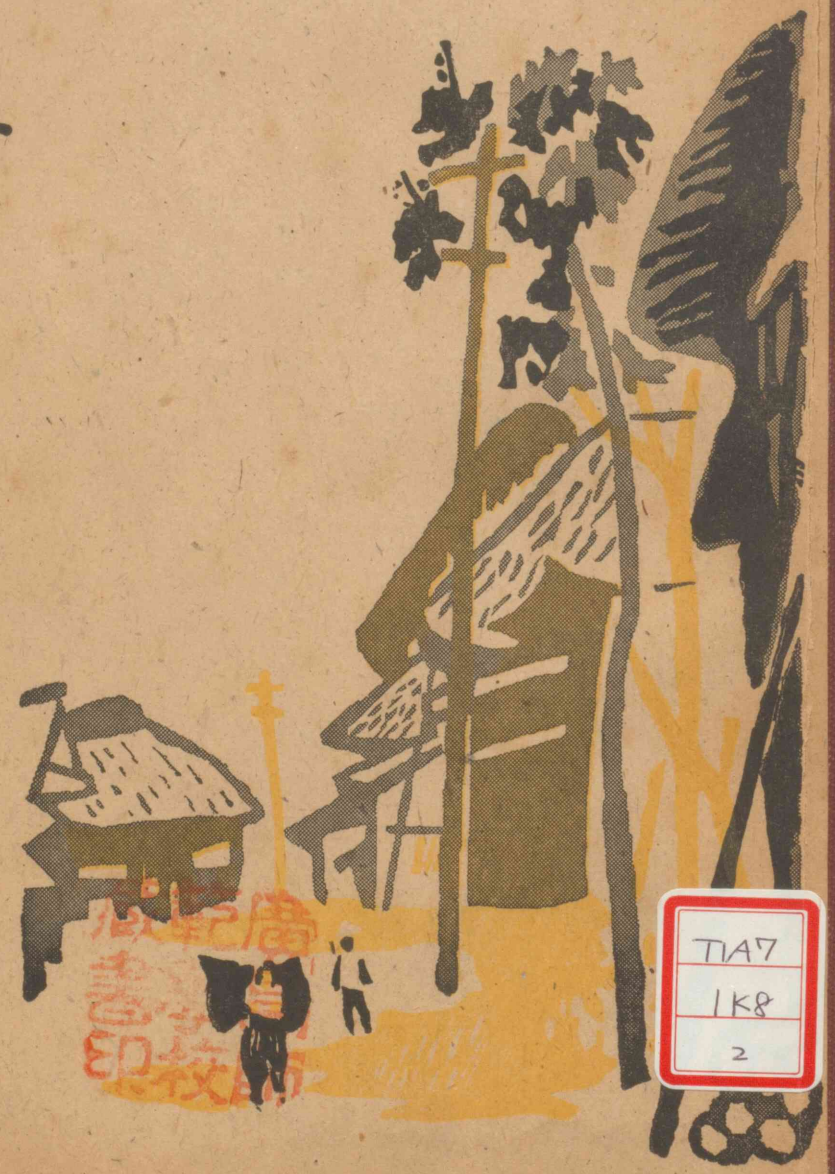
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black

© Kodak, 2007 TM: Kodak



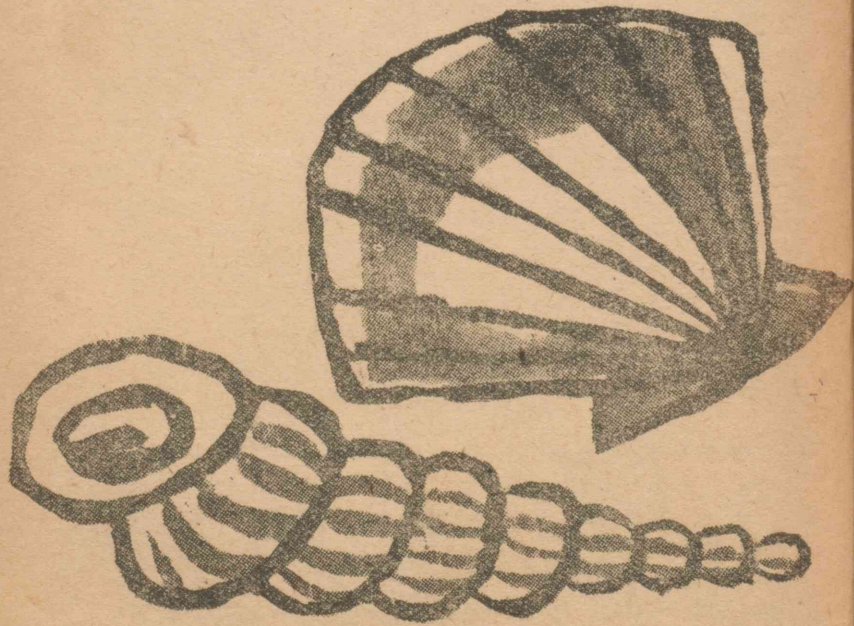
TIA7
1K8
2

國語 第六学年 中



中央図書館

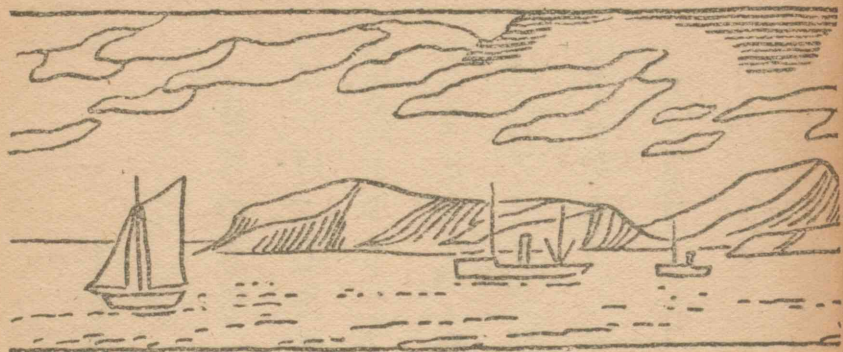
國
語
第六学年
中



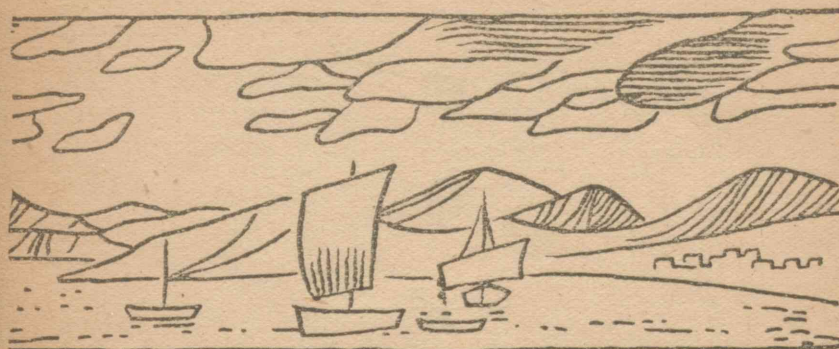
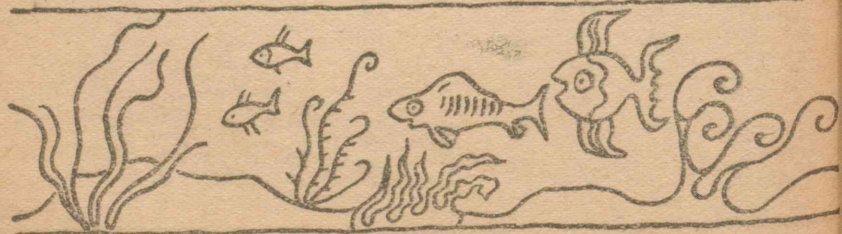
広島大学図書

0130449617

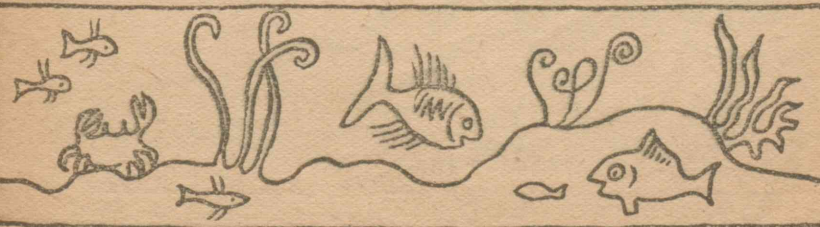




十	九	八	七	六
マッチ賣りのむすめ……………九十	雪の映画……………八十三	(一) 木もと竹うら……………七十七	茶わんの湯……………六十二	とりいれまつりの夜……………五十一



五	四	三	二	一	
心に太陽をもて……………四十二	夜明け……………三十八	星の光……………二十九	外国からきたことば……………十八	おかあさん……………四	もくろく



一 おかあさん

世界の名高い文学者で、その名のわが國に知られている人は、けつして少なくはありません。けれども、フランスのシャルル・ルイ・フィリップの名は、すこしちがった特別なひびきをもつて、私たちの心をうつのです。なぜでしょう。それは、フィリップの作品の中にみなぎっている大きな愛の氣持、そこからさしてくるとい光のためなのです。フィリップは、まずしいもの、苦しんでいるもの、ふしあわせなものの中に、かえつて、人間としての心のとうとさをみつけたのです。そうして、心の正しい人々の苦しみを、自分もともに苦しんだのです。だから、フィリップの作品の中には、たしかに、私たちを心のそこから動かさし、私たち自身の生活を思わずふり返らせないではない強い眞実の力が、こもっているのです。

それというのも、フィリップ自身、中部フランスの小さな町のまずしい木ぐつしの子に生まれ、おさないころから、人の世の苦しみをいろいろとなめていたからのことでした。しかし、フィリップのすなおな心は、まずしさのために、すこしもゆがめられたりはしませんでした。

こうしたフィリップの純眞さ、誠実さ、それは、かれが、父を失った直後、文学修業のためにパリーに出て、市役所のガス係という職についたとき、ふるさとにのこした母へ送つ

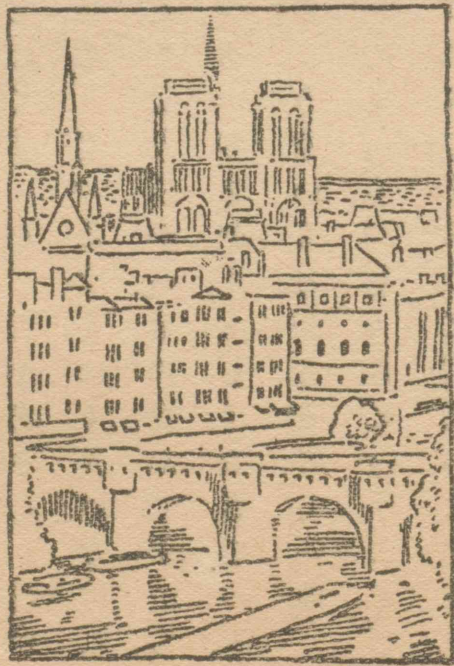
たつぎの手紙の中にもよくうかがわれます。老いた母を思う子の真情は、遠く海をこえて、私たちの胸にまでせまってくるではありませんか。

○

パリ、千九百七年四月十日

おかあさんとちよつとお話をしようと思ひます。私は短い旅をしたあとで、七時にパリに着きました。たつて以来、一分間も、おかあさんのことを考えないではいられません。なつかしいおかあさん、おわかれしてから私がいちばんつらかったことは、おかあさんがかなしがついていらつしやると思ふことでした。

子どもたちのことをお考えになつて下さい。そうして、ご自分にはまだ子どもたちがのこつてゐる、子どもたちはじゆうぶん愛してゐてくれる、だから、自分はたしかにひとりぼっちではないのだと、お考えになつて下さい。どうしても一歩はおこらなければならぬことが、おこつたというにすぎないので。私たちは、おとうさんのために、心からの思い出をまもることにしましう。おとうさんのご一生は、私たちにとつての手本になつてくれるでしょう。おとうさんのお写真を、私は、いつも自分のそ



ばのつくえの上におきます。一生の間、いくたびとなく、おとうさんのおことばを思いだすことにします。それは私にとって、このうえもないたいせつなことばです。が、おかあさん、運命にはしたがわなければなりません。じゅみようにも負けなければなりません。なにしろ、私たちよりふかいものなんですから。私には決心がつかしました。つらいのをがまんして生きていきます。どうしてもなれることのできないことがあるとしたら、それは、おかあさんがかなしがついていらつしゃるということです。なにも、勇氣をだしてわすれてしまおうとお思いになるにはおよびません。なにしろ、おかあさんにしても、私にしても、とてもわすれることのできないのは、わかりきっているのですから。けれども、力をだしてしごとのことをお考えになるのです。おかあさんの生活や、私たちの生活のことをお考えになつて、この世の中には、まだ幸福がのこっている、なぜかといえぱ、妹にしても、私にしても、心からおかあさんを愛しているからだ、こうお考えにならなければいけません。

おかあさん、いま、おかあさんが力をおとしまいになつたら、あなたのルイは、たいへんかなしい思いをしなければなりません。かなしみのために、おからだをおいためになるなんて、どうあつても考えのたりないことです。

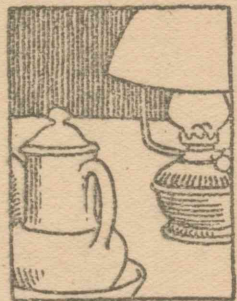
私は、おかあさんが、ちゃんとしていく下さつて、どっちみちさけることのできなかつたことに対して、しつかりしたかくごをおきめになり、自分を愛してくれる子どもたちのことを思って、安らかに生きていく下さるのだと、思いたいのです。



ランプとコーヒー入れとは、あす、送らせませす。ランプについて、いろいろいいことを教えてくれました。くぎへかけるようにしたほうがいいとか、調節ができるとか、ほのおがゆれたりしないとか、光をずっとやわらかくするためには、小さなかさがあるとか——それには、つかいかたを書いた小さな書きつけがついては、はずです。よく説明しておもら

いになるといいと思います。ちつともむずかしいことはありません。いたってべんりにできています。では、おかあさん、さようなら。少なくとも、一週間ごとにお手紙をさしあげましょう。それほど、たえずおかあさんのことを思っているのです。じきに九月になります。そうしたら、おそばに行けます。さようなら。

あなたのルイから



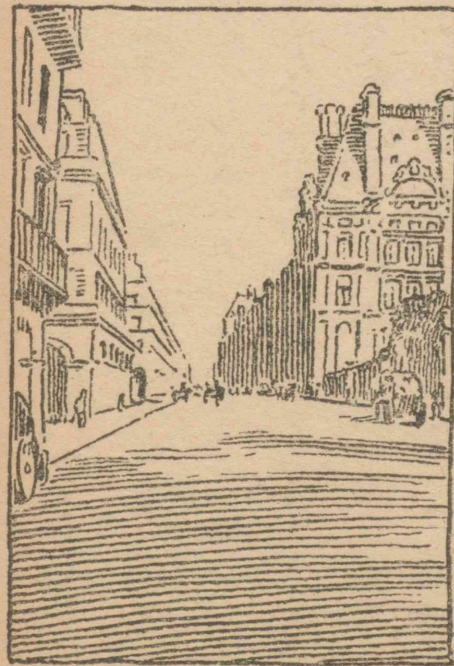
○
パリ、千九百七年四月十一日
おかあさん、いま、ランプとコーヒー入れを送らせました。

このランプは、石油でもきはつ油でも、どちらをおつかいになつてもかまいません。が、きはつ油をおつかいになつたほうがいいのです。ランプはかべにおかけなさい。きはつ油のさしかたは、ご自分でなさつてごらんなさい。調子をどとのえるには、どうをあらちらこちらにまわすのです。いっしょに小さなかさを送りました。たぶん、とちゅうでこわれるだらうというこ

とでしたが、もしこわれたら、そちらでわけなくかわりをお見
つけになれるでしょう。それに、ランプは、かきなしてもりっ
ぱに役にたちます。かさは、光をへいきんさせ、もつとやわら
かくするためなのです。

これは、私の友だちで、母親が十年このかた、この式のラン
プをつかっているというのが
教えてくれたことなのです。
その友だちの母親は、このラ
ンプに満足しきっているそ
うです。

小包二つは、おそろくいっ
しよには着きますまい。コト



ヒー入れは、中に小さなめもりのようなものがついていて、ど
こまでコトヒーを入れていいのか、おわかりになります。それ
に、小さなさらがありません。それは、コップの上からコーヒー
こしをとったとき、それをのせるためなのです。

おかあさんのことを思っております。夜をどうしてすごして
おいででしょうか、お知らせください。もうじきお目にかかれ
ます。あなたを思うすべての心をかたむけて、さようなら。

ルイ

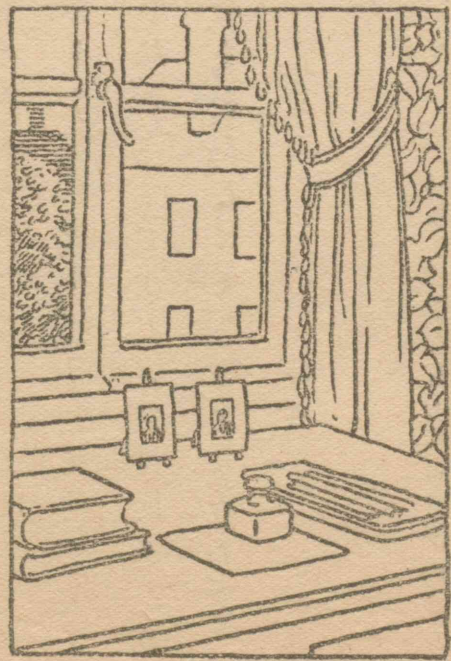
○

パリ、千九百七年四月十六日

おかあさんのことを思っています。あなたがたおふたりの写
真は、いま、この手紙を書いているつくえの上、私の前におい

てあります。おとうさんに対しては、このうえなくまめやかな、このうえもなく純真な思い出がのこっています。

おとうさんのお写真は、ほんとうに生き写しで、生きておいてになったときそのままです。そうして、おかあさん、あなたのことを思うとき、「おかあさんと私とは、おたがいに、それほどはなれてはいないのだ、もうすこしすれば、ごいっしょに一月をくらせるのだ、自分としては、力のかぎりおかあさんを幸福にしてあげしよう。」と、こんなことが思われてくるのです。



おかあさんが、もし、かなしいお氣持になられたときには、自分には子どもがあるということをお考えになって、力をとりなおしてくださいるように聞いています。

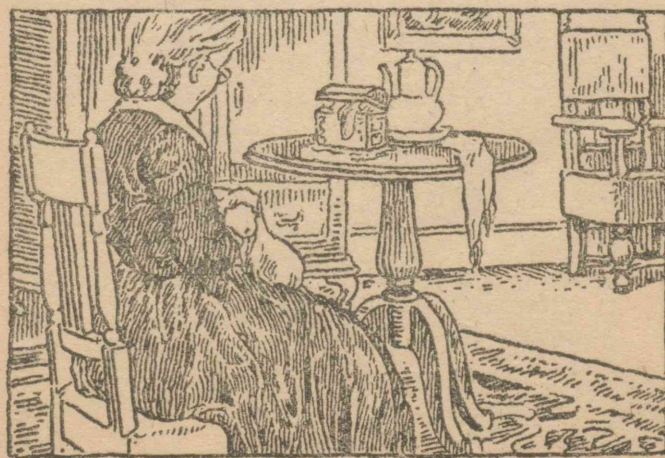
おかあさんがご用でしたら、いつでもとんで行きます。おかあさんのおやさしさこそ、私にとっては、いちばんとうとい宝なのです。

おとうさんのおはかについては、どうしたものか、ちょっと私にはわかりかねます。が、おかあさんのおすきなようになさってください。

おかあさん、これからたびたび手紙をあげることになりました。そうすれば、おあいしに行く日のくるまで、いままでより時間が早くなったでしょうから、たとい、からだはこちらにいて

も、このまごころを書いてお送りして、せめてものおなぐさ
めにしたいと思つています。私がそば
にいないことなど、すっかりおわすれ
願ひましよう。いつもこう思つていて
ください。あなたが私を思つてくださ
るとき、私もおかあさんのことを思つ
ていると。

ランプがお氣にいつて、うれしく思
いました。すこしこみいりすぎている
とお考へてはないかと心配していまし
た。パリーにある、なにかさういつた
ものがご入用のときは、ごえんりよなくおつしやつてください。



夜が長すぎはしませんか。おひとりでさびしすぎるとは、お
思ひになりませんか。

どんなにしていらつしやいますか、お知らせください。私に
は、おかあさんのおすがたが、目に見えるような氣がします。
どの時間になにをしていらつしやるか、この私にはわかるので
す。

では、おかあさん、さようなら。きょうはこれでお話をやめ
ます。が、近いうちにまたはじめましよう。さようなら。

あなたのルイ



二 外國からきたことば

学校で、そうじをしているとき、高山くんが、思
いだしたように、

「バケツは、もとは英語だつてね。ゆうべ、にいさんに聞いた
よ。」

といった。

すると、窓ガラスをふいていた田中さんが、

「カーテンも英語じゃないかしら。」

といった。

これを聞いていた野村さんが、

「では、バケツやカーテンなどは、日本語で、なんといい
たんでしよう。」

とたずねた。

「さあ。」

田中さんが答えられないでいると、高山くんが、

「カーテンは、まどかけさ。」

「では、バケツは。」

「バケツはね、手おけさ。」

「手おけ、手おけはちよつとおかしいわね。」

「それではなんだろう。」

「さあ。」

そこへ先生がいらっしゃった。みんなの話をお聞きになって、

「そうか。そうじがすんだら、そのことについて話をしよう。」とおっしゃった。

それで、みんなは急いでそうじをすませた。

みんなが席につくと、先生は、私たちのつかっていることばの中で、外国からはいつてきたことばが、いろいろまじっていることをくわしく話してくださいました。

そうして、つぎのようなことばはその一例だとおっしゃって、こくばんにお書きになった。



「グレヨン、ペン、ナイフ、ゴム、ランドセル、ピアノ、オルガン、バイオリン、ハーモニカ、シャツ、ボタン、ポケット、ズボン、オーバー」。

「ずいぶんあるなあ。」

とあって、みんながおどろいていたが、先生は、つぎつぎと書き続けられた。

「ミルク、コーヒー、ジャム、トマト、キャベツ、バス、トラック、オートバイ、リヤカー、ハンドル」。

みんなは、「ほう」とか、「あれもそうか」とかいいながら、先生のお書きになる文字に目をそそいだ。

先生は、そんなことにはおかまいなしに、どんどんお続けになった。

「ボール、テニス、ピンポン、ラケット、スキー、ラジオ、ニュース、レコード、チフス、コレラ、マラリア、トラホーム、アルコール、ガーゼ」。

とうとう、こくばんがいっぱいになってしまった。

「へえ。」

私たちは、あまり多いのおどろいた。

佐藤さんが、

「先生、私は、これはみんな、日本語だとばかり思っていました。」

と、さもふしぎそうにいうと、先生は、

「いや、いまは日本語にちがいないが、もとは、外國のことばさ。それが長い間つかっているうちに、すっかりなれてしまつて、日本語になつたと考えていいだろう。」

とおっしゃった。それから、タバコ、キセル、カルタ、カボチャも、外國語であつたとお話しになつたので、私たちは、いよいよおどろいた。

先生が、

「それでは、これらのことばは、もとはどこの國のことばだつたのだろう。」

とおっしゃったので、みんなは口々に、

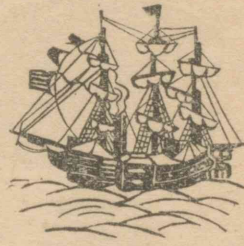
「英語です。」

と、そくぎに答えた。すると先生は、



「外國からはいつてきたことばは、英語だけではなく、ほかの國からも、いろいろはいつてきている。たとえば、ここにあげたことばの中でも、クレヨン、ズボン、フランス語、ゴム、ランドセル、コーヒー、コレラ、アルコールはオランダ語、チフス、トラホーム、ガーゼ、スキーはドイツ語。それから、タバコ、カルタは

ポルトガル語、キセルとカボチャはカンボジア語だといわれて
いる。そのほかのことばは、みんな英語だ。



先生のお話を聞いているうちに、私は、どうしてこんなにくさんのことばが、いろいろな國からはいつてきて、日本語になったのだろうか、ふしぎになってきた。それで、私は、

「先生、どうして、そんなにたくさん外国のことばが、日本語になったのでしょう。」
とおたずねした。

それは、外国と交通をして、日本になかった品物が、外国から伝えられたときに、そのことばもいつしよにはいつてきたので、たとえば、ラジオといつしよに、「ラジオ」ということばがは

いり、タバコとともに、「タバコ」ということばが、伝えられたと
いうことがわかった。

私は、このお話から、さまざまなことが心にうかんできた。
ものごとくが、いつしよになっているということは、あたり
まえのことだが、なかなかおもしろいと思った。

だから、これからのちも、新しいものが世の中にできてくる
と、ことばも、それにつれて、新しく生まれるものであること
が、考えられる。「ことばのおたんじょう」などというお話が、つ
くれそうな氣がしてきた。

それから、外国のことばがはいつてきたのは、品物からだけ
ではなく、外国の学問などが傳わつてきたときに、そのことば
もいつしよに傳わつてきたのにちがいない。そうしてみると、

あろう。



このあいだ、先生から、日本にはいつてきた西洋医学は、はじめオランダからはいり、そののちはドイツ医学がおもに傳わつたとうかがつたが、このことから考えあわせてみると、コレラは、オランダ医学がいつてきたときに、また、チフスやトラホームは、ドイツ医学がいつてきたときにそれぞれ傳わつたことばであらう。また、音楽の時間によくつかう、リズムとか、ハーモニーとか、そのほか、コーラスとか、ソナタとかいうことばは、西洋音楽がはいつてきたときに、いっしょに傳わつてきたことばであらう。また、図画工作の時間によくいう、デッサンとか、モデルとか、バックとかいうことばも、西洋の油絵がはいつてきた

たときに傳わつてきたのだということが想像される。

それから、ふと、古くから日本といちばん関係のふかかった大陸からは、どんなことばがはいつてきたのだらうかと思った。それで、先生にそのことをおたずねすると、先生は、

「たとえば、『漢語をつかう。』などというときの漢語は、たいてい大陸からきたことばだ。それが、あまり古い時代にはいつてきて、長い間つかつていゝうちに、もともとの日本語のようになつてきたのだ。」とおっしゃつた。

私は、自由研究で、外國からきたことばの中で、西洋からきたことばをできるだけたくさん調べてみたいと思つた。そこで、どうすれば、外國からきたことばが調べられますか。

とおたずねした。

「それは、國語辞典をひいてみると、だいたいわかる。その中で、かたかなで書いてあることは、たいてい西洋からきたことばと思つていい。たくさん出てくるよ。それから、外來語辞典というものもあるから、それを調べると、なおいっそうよくわかるだろう。」

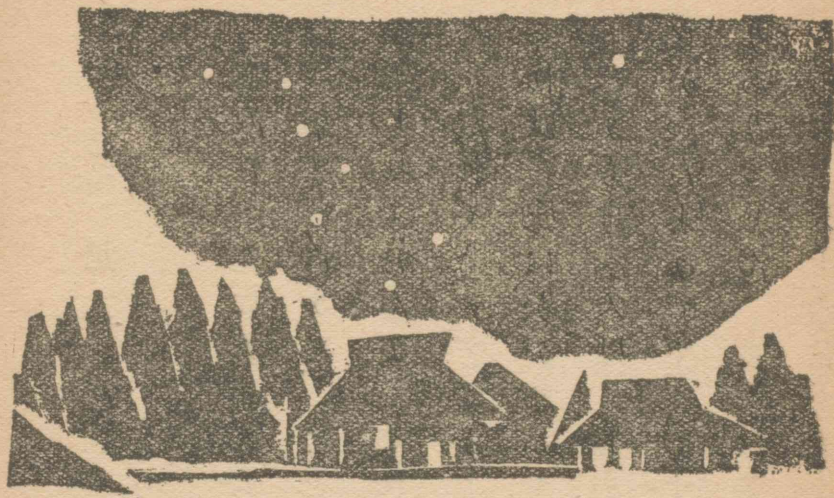
私は、なにか大きな楽しみをもつたような氣持になつて、家に歸つてきた。



三 星の光

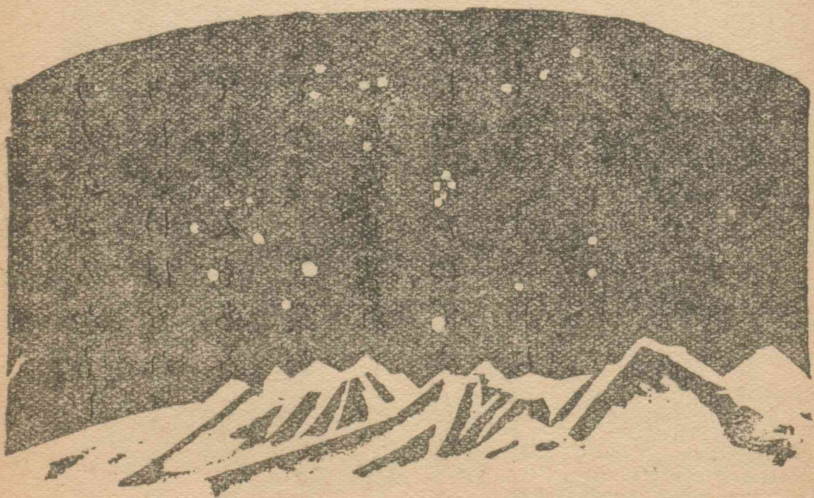
あなたがたに見てもらいたいものがあるのです。見てもらいたいなどというと、どこかにしまつてあるもののように聞えるかもしれませんが、これはけつしてそういうものではありません。だれでも、どこからでも、自由に見られるものなのです。それは、空にかがやいている星です。

どうも日本人は、むかしから、あまり星に親しみをもつていなかったようです。ですから、星のおとぎ話は、日本にはあまりありません。日本は景色のよい國で、花がたえずさいていたために、天上の花を見ようとはしなかつたのだらうという人も



ありますが、そればかりとも思われ
ません。かりにそれがほんとうのこ
とだとしても、自分の身近なものし
か見ないで、遠いもの、大きなもの
に心をくばることがたりなかつたの
は、ざんねんなことだと思えます。
小さな島國に住んでいたために、氣
持までちっぽけなものになってしまっ
たのでしょうか。むかしのことはし
ばらくおき、これからの人の心がま
えは、大きくなくてはいけません。な
んでも日本、日本と、日本だけが特別

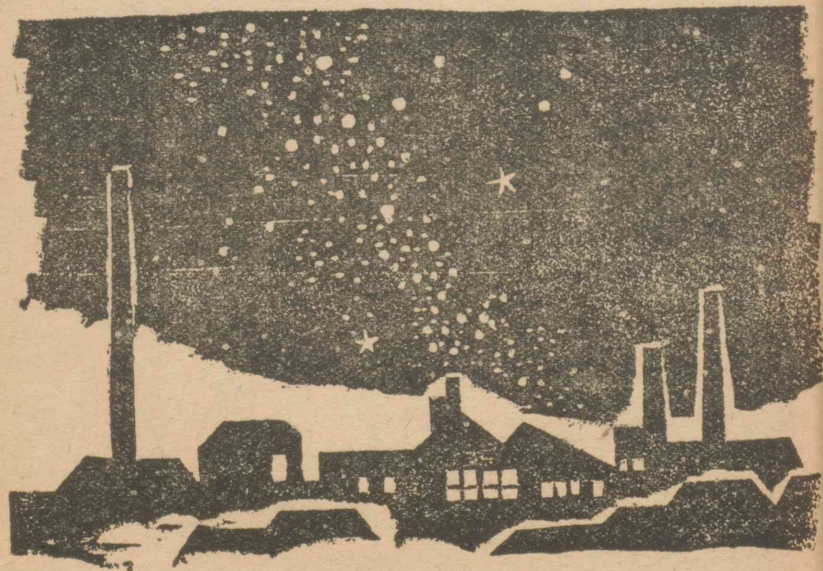
の國でもあるかのように考えて、
世界全体を見わたすことをわすれて
いたのは、よくないことでした。そう
いうちっぽけな考えでは、とても世
界の中にはたつていけません。あな
たがたは、これからの日本にとって
だいじなかがたです。あなたがた
の考えひとつで、日本はよくもわる
くもなるのです。あなたがたのもの
を見る目、ものを考える力が大きく
なっていけば、日本は、見ちがえる
ほどりつばな國になっていくのです。



さて、私は、あなたがたに星を見るようにすすめました。が、中には、「星を見たってなにになる。」という人があるかもしれない。天上の星とあなたがたとは、あまりにかけはなれているために、自分たちとはえんがないと思っっている人もあるでしょう。けれども、星をこまかく観察したことから、農業が進歩したので。こよみが作られたのです。天文学が生まれたのです。数学が発達したのです。航海術がさかんになったのです。宗教も、科学も、哲学も、ふかまっていったのです。よそ目には、星と人間とは、たいして関係がなさそうですが、じつは、ふかいつながりがあるのです。人間は、星によってみちびかれ、星によって生きているといってもいいすぎではありません。

みなさんは、地球や金星などのわく星が、太陽を中心として

回轉していることを知っています。この一むれの星を、ふつう太陽系とよんでいます。しかし、この太陽系は、ぎんが系といわれる星の大きな集まりの一部分にしかすぎないのです。このぎんが系というのは、地球をとりまいている天の川の内がわにあるたくさんの星のむれなのです。それでは、このぎんが系全体が、星の世界の全部かというとなかなかそうではありません。あ



のぎんが系に負けなほほど大きな星の世界が、なおいくつかあるのです。

こうなつてくると、うちゅうというものは、どこまで廣いか、想像がつきません。しかし、アインシュタイン博士の話によると、うちゅうは、けつしてはてしのないものではありません。博士の計算では、うちゅうのさしわたしは、およそ二十億光年ということです。二十億光年——わかりますか。光が一方のはしから、向こうのはしまでとどくのに、二十億年も、かかるほどの廣さなのです。

この廣大なうちゅうにくらべては、太陽もごく小さなものです。地球などになると、なおさら、ごくごく小さなものです。したがって、その地球の上に住んでいる人間などは、バクテリア

よりも、もっともつと小さなものに感じられるかもしれません。大うちゅうから見たら、たしかに、人間は、バクテリアにもおとるほどの小さなものでしょう。しかし、それだからといって、すこしもかなしむことはありません。そのバクテリアにもおとる小さな人間が、引力の法則を発見したり、うちゅうの大きさを計算したりするではありませんか。これを思えば、人間のかたというものは、うちゅうにも負けないくらい廣大で、すばらしいものだということができるでしょう。

みなさん、ごらんさい、あの天上の星を。まあ、なんとうしずけさでしよう。なんとう美しさでしよう。なんとうおごそかなすがたでしよう。じいっと大空の星をながめていると、はてしのない、遠い世界にひきこまれるような氣がします。

まことに、星の光は、声のないことばです。ことばのない詩です。教えを説かない教えます。むかしからすぐれた人たちは、星の光の中からふかい思想を読みとりました。さまざまな術を発達させました。

聞くところによると、キューリー夫人は、まずしい学生であったとき、物理の時間に、先生から、星をつかめといわれ、そのことばにふかい感動を受けたということです。夫人は、星はつかまなかつたのですが、その



感動から研究を進めて、ついにラジウムを発見したのです。

みなさん、あなたがたは、いま、日々の生活にもつらい思いをしています。そんなことにへこたれてはいけません。ひくつになつてはいけません。心を大きくもってください。世界全体を、人類全体を、そうして、うちゅう全体をながめわたす大きな目をもってください。そうすれば、人間がだいいちにしなければならぬことは、なんであるかということも、しぜんにわかつてくるはずです。もし、くしゃくしゃするようなことがあつたら、どうか天上の星を見あげてください。星は、きっと、あなたがたに力をあたえてくれるにちがいありません。

四 夜明け

一の人 「音がする。 ああ、音がする。」

みんな 「二の人の見ている方を遠く見つめる。」

「聞える、夜明けの音楽が聞える。」

二の人 そのままのまのこつこうで、「聞える、わたしにも聞える。」

三の人 「明かるいひびき。」

一の人 「夜が明ける。」

二の人 「東の空が明かるくなってくる。」

三の人 「朝が近づく。」

みんな 「夜明けの足音、しずかな夜明け。」

四の人 「暗いとばりが、たち切られる。」

五の人 「ゆめがさめた。長いゆめがさめた。」

三の人 「夜が明ける。」

みんな 「みんなの朝がくる。」

一の人 「わたしたちの、楽しい朝がくる。」

五の人 「深呼吸をしよう。」

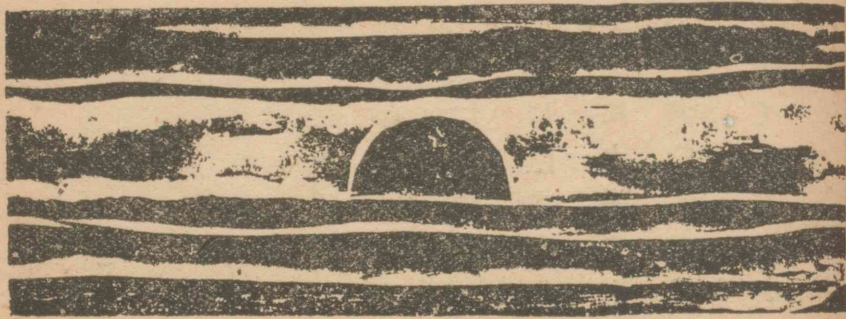
みんな 氣持よく、のびのびと深呼吸をする。

一の人 「なんとさわやかな夜明けだろう。」

二の人 はるか遠くの方を指さして、「光、光だ。」

四の人 「光だ。」

三の人 「希望の光。」



みんな「平和と自由」。

一の人「友よ、友よ、この美しい朝をむかえよう。」

二の人「この光を全身にあびよう。」

三の人「喜びにみちてかがやく光。」

みんな「かたまって、朝日が、朝日がのぼる。」

二の人「朝風がふいてきた。」

一の人「山もはつきり見えてきた。」

三の人「わたしたちの前に、朝がきた。」

一の人「みんな、両手をのばせ。」

みんな「胸をはれ。」

みんな空をあおぐ。美しい音楽がひびく。



五の人「喜びの光。」

四の人「きれいな、きれいな雲ではないか。」

二の人「大空がほおえんでいる。ばら色にわらって
ている。」

三の人「おおらかな朝。」

みんな「おごそかな朝。」

一の人「日本の朝。」

二の人「わたしたちの朝だ。」

三の人「新しい世界のおとずれ。」

四の人「わかかわかしい世紀のひびき。」

五の人「平和と自由の光がさしてくる。」

五 心に太陽をもて

心に太陽をもて

心に太陽をもて、

あらしがふこうが、雪がふろうが、

天には雲、

地にはあらしがたえなかるうが、

心に太陽をもて。

そうすりや、なにがこようと、平

氣じゃないか。

どんな暗い日だって、

それが明かるくしてくれる。

くちびるに歌をもて、

ほがらかな調子で、

日々の苦勞に、

よし心配がたえなくとも、

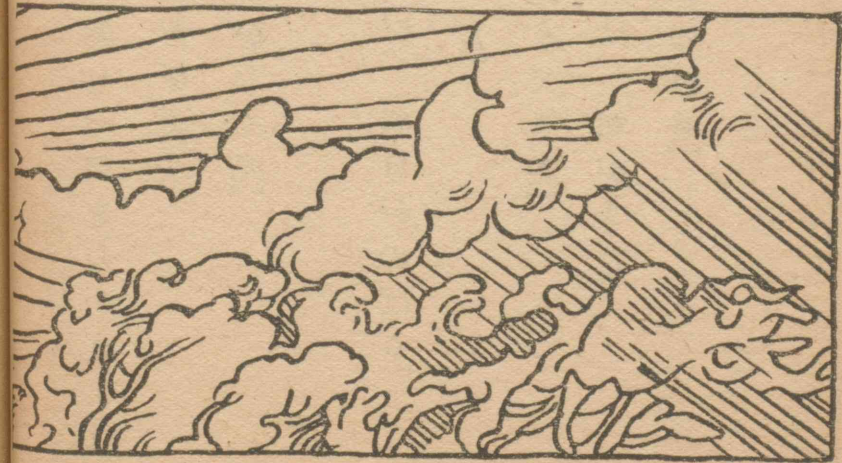
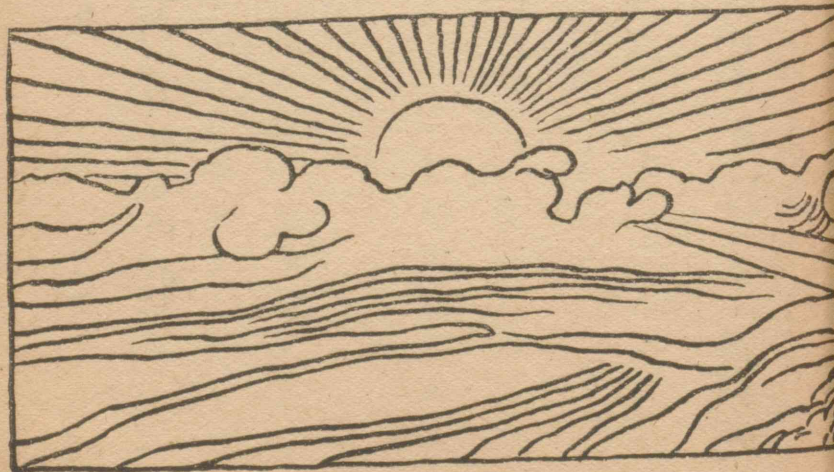
くちびるに歌をもて、

そうすりや、なにがこようと、平

氣じゃないか。

どんなさびしい日だって、

それが元氣にしてくれる。



他人のためにもことばをもて、
なやみ、苦しんでいる他人のためにも。
そうして、なんでこんなにはがらかかていられるのか、
それを、こう話してやるのだ。
くちびるに歌をもて、
勇氣を失うな。

心に太陽をもて、
そうすりゃ、なんだってふっとんでしまう。

くちびるに歌をもて



スコットランドの西岸のおきあいで、ローマン
号という小さな汽船が、十ばいもある定期船につ

きあたって、ちんぼつしてしまいました。千九百二十年十月の
ある月のない夜のことです。乗っていた百四人のうち、乗組員
十一人、船客十四人のゆくえがわからなくなりました。

アイリツシユ・ナショナル保険会社の社員、フランク・マツ
ケンナも、しずんでいく船からほうりだされて、黒い波の間を
およいでいました。助け船は、いったい、なにをしているのだ
ろう。かれは、氣が氣ではありませんでした。

助けを求めてなきさけぶ声も、いつか聞えなくなりました。
すべてのものが、ことごとく波にのまれてしまったように、死
のしずけさがあたりに廣がりました。すると、そのきみのわる
いしずけさの中から、とつぜん、まったく思いがけなく、きれ
いな歌が流れてきました。それは女の声で、しかも、調子もみ



だれていなければ、ふるえても
いません。まるで、大ぜいの來
客を前にして、客間で歌ってい
るのと、ちっともちがわないよ
うな歌いかたです。

マツケンナは、しばらくしん
みりした氣持で、この歌に聞きほれていました。かれは、いま
までにどれだけ歌を聞いたかしれませんが、このときぐらい、
しみじみと歌のありがたさを味わったことはありませんでした。
なんだか、すうつといい氣持になって、自分が水の中にひたっ
ていることも、わすれてしまったほどでした。寒さも、つかれ
も、どこかへけしとんでしまつて、すっかり、よみがえつたよ

うな氣持になりました。

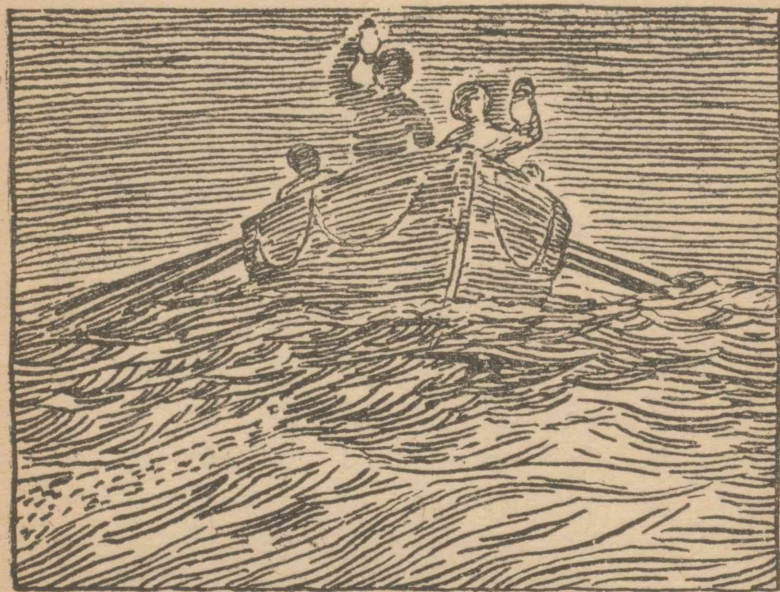
歌っている人は、どういふ人
かわかりませんが、おそらくは、
自分と同じように、船からなげ
だされたものでしょう。たいて
いの人は、しようどつどつとき
あわてふためいて、そのために、
かえって波にのまれてしまった
のに、こんなきけんのせまった
中で、なんというおちついた、
またなんというほがらかな入だ
ろう。自分なんか、およいでい



るだけがせいぜいなのに、こんな暗い夜、こんな海のまん中で、よくあんな美しい声がだせるものだと思います。そうして、自分もどうせ助からないものなら、こういう美しい歌に送られて、死んでいきたいものだと思います。

かれは、歌の声をたよりに、その方におよいで行きました。近づいてみると、船がしずむひょうしに流れ出たものらしい一本の大きなまるたに、なん人かの婦人がつかまって、立ちおよぎをしていました。歌を歌っているのは、その中のひとりでした。

まだわかいおじょうさんです。頭から大波をかぶっても、平気で歌を続けていました。助け船のくるのを待つ間、ほかの婦人たちが力をおとさないように、寒さに氣を失って、まるたか

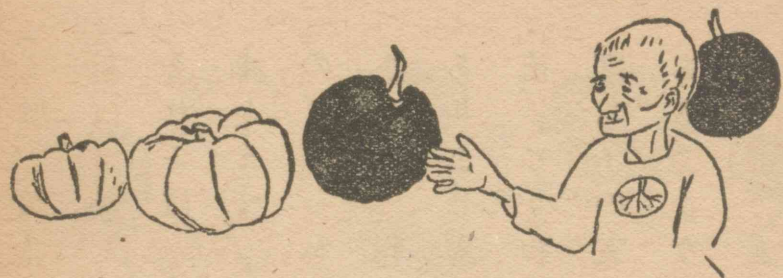


ら手をはなさないように、こうして元氣をつけていたのです。

「心に太陽をもて、
くちびるに歌をもて。」

このおじょうさんは、この歌を知っていたかどうか知りませんが、しかし、このおじょうさんくらい、この歌の心を生かした人は少ないでしょう。このおじょうさんこそ、ほんとうにこの歌を歌った人というべきです。

さて、おじょうさんの歌をた



六 どりいれまつりの夜

ある家の、かぼちゃのどりいれまつりの晩のこ
とでした。

「ひさしぶりにごちそうをたべて、たいへんゆか
いです。それで、よきように、「このかぼちゃは
だれのものか」という話しあいをやってみたら、
おもしろいだらうと思います。」

こういいだしたのは、根のしるしをつけた老人
でした。

「賛成、賛成。」

よりに、マッケンナがおよいで行ったように、やがて、一そ
うのポートが、やみをぬって助けにきてくれました。やはり、そ
の美しい声を手がかりにして。
そうして、マッケンナも、その歌を歌っていたおじょうさん
も、そのほかの婦人たちも、みんなすくいあげられました。
このことは、あくる日の新聞に出たマッケンナの話で、あき
らかになったのですが、おいしいことに、歌を歌ったおじょうさ
んの名まえがわかりません。しかし、たとい、名まえはわから
なくても、あの美しい歌は、いまでも、われわれの耳にひびいて
くるように感じられるではありませんか。



ち花のものだということはいやうたがいありません。
「こんどは、葉さん、いってごらんなさい。」
葉は、元氣のいい青年でした。
「花さんは、たいへんじょうずに自分のことを主張なさいましたね。しかし、どうしてそのめしべの根もとがふくれて、そんな大きな実になったかということ、ごぞんじないようですね。それは、私が、いつも日あたりのいいところに出て、じりじりと暑い日に照らされながら、せつせと養分をこしらえて、送ってあげたからですよ。私は、せつかく花が開いても、とちゅうから、黄色くなって落ちてしまったたくさんのか

「では、花さんからおはじめなさい。」
花は、美しいわかい女でした。
「それでは、座長の根さんのご指名で、私から申します。もちろん、このかぼちゃは私のものです。私の花がさかなかつたら、実はずきません。根や、つるや、葉のないかぼちゃはありませんが、それだけでは実はずきません。花、とりわけ、め花がさいて、はじめて、かぼちゃの実がつくのです。こんな、十キロもあるような大きなかぼちゃでも、それは、花の一部であるめしべの根もとが、大きくふくれただけのものです。だから、それは、私た

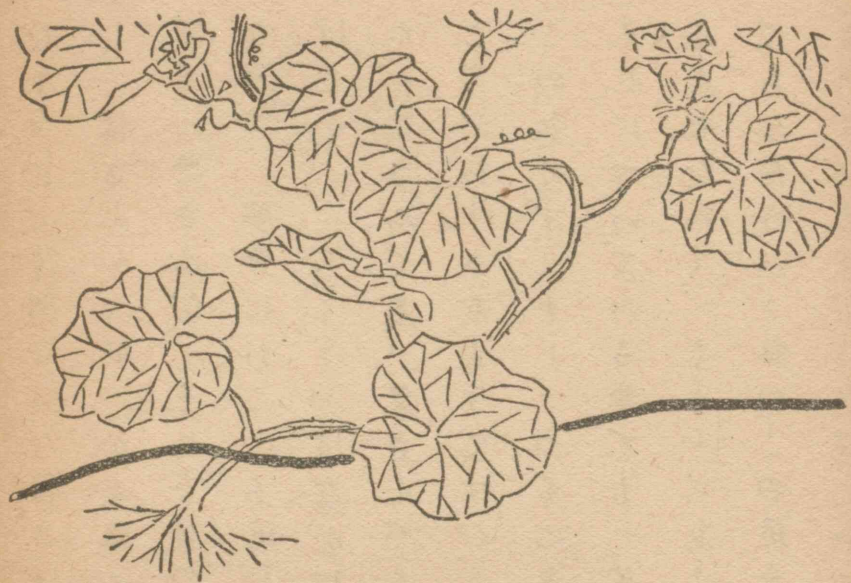


ぼちやの花を見えています。あれは、私たちの養分をこしらえる力をかまわずに、あなたがたが、かってに花をさかせたからですよ。だから、このかぼちやは、全部私のものだと思います。

では、つるさん、どうぞ。

「いや、どうか根さんから。」

では、おさきに申します。さつき、葉さんは養分のことをおっしゃいました。それは、大部分、根の私が、土の中から吸いとって、送ってあげたものです。みなさんのように、明るい地の上でくらしているかたには、土の中のことはわからないでしょう。そこは、暗いところで、土もかたいし、石ころなども、ごろごろしています。そこへ細い根をのばして、



水と養分とを吸いとって、夜も晝も送ってあげるのは、たいへんなほねおりです。だから、私は、やっぱりそのかぼちやは、私のものだと思います。

「ほかに、だれもいませんから、私が申します。」

おとなのつるは、しずかにいました。

「私は、こんなに長いばかりで、花さんや、葉さんや、根さん

のような、特別なはたらきは、なに一つございませぬ。しかし、根さんが、せっかく吸ってくださった地の中の水や養分でも、葉さんが、それを日の光にあてたり、空気をお吸いになつて、養分におこしらえになつたものでも、私が運んであげなかつたら、りっぱなかぼちゃの実にはなりません。また、花さんでも、葉さんでも、日のあたるところや、高いところがおすきなようですが、そこへつれて行ってあげるのは、この私です。もし、つるの私がとちゅうで切れたりしたら、それについている葉でも、花でも、なりかけている実でも、みんなかれて、くさってしまいます。ごらんなさい、私のこの足を、手を。こんなに大きなきずができていますが、私は、いっしょうけんめいそれをなおして、

あなたがたがかれないうにしてあげたのです。だから、私は、そのかぼちゃは、全部私のものだと思います。つるがこういったとき、高い声でわらいながら、どやどやとほいつてきたものがあります。それは、頭のぼうして、日、水、土、はちたちだということがわかりました。



「あははは、いま、戸の外で聞いていると、あなたたちは、ずいぶんかってなことをいつていましたね。あなたがたは、自分のことしか考へないようですが、もし、私、つまり太陽がなかつたら、どうなると思います。」

「いったい、かぼちゃは熱帯地方のものです。それがこの日本でできるためには、私が熱と光とをゆたかに送ってやった

からです。さつき、葉さんや根さんは、養分のことをいって
いらっしやいましたが、それを養分につくるのは、葉さんで
はなく、私ですよ。そういうことを考えてみたことがありますか。



水が続いていました。

「生きものに、いちばんたいせつなものは、私たち水です。水がなかったら、なんでもすぐ、かれたり死んだりしてしまいます。この大きなかぼちゃは、ずいぶんかたいようですが、やっぱり、この大部分は水です。いまのお話の養分だって、水にとけているから、根から実まで運んでいけるのですよ。それから、空から降る雨、あれだって水ですよ。あのかわききった夏のさいちゅう

に、あの雨のおかげで、かれるのが助かったことを考えてごらんなさい。」

土が立ちました。

「ぼくは、いちばんじみなものです。しかし、土にはえていないかぼちゃなんて見たことがない。さつきから問題になって、いる養分だって、みんな私がわけてあげたのです。水だって、ためておいてあげたのです。ほかのことはわすれても、この土のことは、かたときもおわすれになれないでしょう。」

すると、いたずらなはちがいました。

「花さん、あなたが、どんなに美しくさいたって、ぼくがとびまわって、かぶんをなかだちしてあげなかつたら、実は一つもつかなかたのです。」



よ。だから、あのかぼちゃは、みんなぼくのものだといってもいいのです。しかし、ぼくは、そんなよくのふかい、身がつてなことはいいませんよ。あなたがたは、どうして地面にはえたのか、考えたことがありますか。

花も、葉も、つるも、首をひねって考えていました。しばらくして、根がいました。

「ああ、やアと思いだした。人



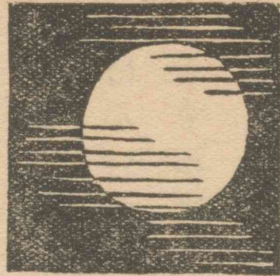
間が来て、まいてくれたのだった。もし、あの人間がいなかったら、また、その人間がせわをしてくれなかったら、私たちは、はえもしなければ、大きくもならなかったかもしれない。つるも、うなずいて、

「そうです。このかぼちゃは、だれのものとも、簡単にはいえませんね。公平にいつて、みんなのものです。しかし、いちばんいい種を、来年もわすれずにまいてもらうことができさえすれば、このかぼちゃは、お礼に、すっかり人間にあげてしまっても、さしつかえないと思えますが、どうでしょうか。

「同感。同感。

と、日や、土や、水などがいいました。花も、葉も、根も、みんな賛成しました。

七 茶わんの湯



ここに、茶わんが一つあります。中には、熱い湯がいっぱいはいっております。ただそれだけでは、なんのおもしろみもなく、ふしぎもないようですが、よく氣をつけて見てみると、だんだんに、いろいろのこまかいことが目につき、さまざまのうたがいがおこってくるはずです。ただ一ぱいのこの湯でも、自然の現象を観察し、研究することのすきな人には、なかなかおもしろい見ものです。

第一に、湯の表面からは、白い湯げがたっています。これは、

いうまでもなく、熱い水蒸氣がひえて、小さなしずくになったのが、無数にむらがつているので、ちようど雲やきりと同じようなものです。この茶わんをえんがわの日なたへ持ちだして、日光を湯げにあて、向こうがわに黒いぬのでもおいてすかして見ると、しずくのつぶの大きいのが、ちらちらと目に見えます。ばあいにより、つぶがあまり大きくないときには、日光にすかして見ると、湯げの中に、にじのような、赤や青の色がついています。これは、白いうす雲が月にかかったときに見えるのと、似たようなものです。この色については、お話することがどっさりありますが、それは、また、いつかべつのとくにしましう。

すべて、まったくどう明なガス体の蒸氣が、しずくになると

きには、かならず、なにか、そのしずくのしんになるものがあつて、そのまわりに、蒸気がこつてくつつくので、もし、そういうしんがなかったら、きりは、たやすくできないということ、学者の研究でわかつてきました。そのしんになるものは、ふつうけんび鏡でも見えないほどの、たいへんこまかいちりのようなものです。空気中には、それが、しぜんにたくさんういているので、空中にうかんでいた雲が消えてしまったあとには、いまいった、ちりのようなものばかりがのこつていて、飛行機などで、横からすかして見ると、ちょうど、けむりが廣がっているように見えるそうです。

茶わんからあがる湯げをよく見ると、湯が熱いかぬるいかが、おおよそわかります。しめきつたへやで、人の動きまわらないときだと、ことによくわかります。熱い湯ですと、湯げの温度が高くて、まわりの空気にくらべてずっとかるいために、どんなとさかんにはちのぼります。反対に、湯がぬるいと、いきおいがよいわけます。湯の温度を計る寒暖計があるなら、いろいろ自分でためしてみると、おもしろいでしよう。もちろん、これは、まわりの空気の温度によつてもちがいますが、おおよそのけんとうは、わかるだらうと思ひます。



つぎに、湯げがのぼるときには、いろいろのうずができます。これがまた、よく見ていると、なかなかおもしろいものです。せんこうのけむりでもなんでも、けむりの出るところからいくらかの高さまでは、まっすぐにあがりますが、それ以上は、け



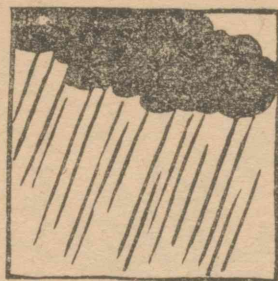
むりがゆらゆらして、いくつものうずになり、それがだんだんに廣がり、入りみだれて、しまいに見えなくなってしまう。茶わんの湯げなどのぼあいだと、もう、茶わんのすぐ上から大きくなうずができて、それが、かなり早くまわりながら、のぼっていきます。

これとよくにたうずで、もっと大きなのが、庭の上などにてきることもあります。春さきな

どの、ぼかぼかあたたかい日には、前日雨でも降って、土のしめつているところへ日光があたつて、そこから白い湯げがたつことがよくあります。そういうときに、よく氣をつけて見ていてごらん下さい。湯げは、えんの下やかきねのすきまから、つめたい風がふきこむたびに、横になびいては、また、たちのぼります。そうして、大きなうずができて、それが、ちようどたつまきのようなものになって、地面からなんメートルもある、高い柱の形になり、たいへんな早さで回轉するのを見ることがあるでしょう。

茶わんの上や、庭さきでおこるうずのようなもので、もっと大じかけなものがあります。それは、らい雨のときに、空中におこっている大きなうずです。陸地の上のどこかの一地方が、

日光のために、特別にあたためられると、そこだけは、地面から蒸発する水蒸気が、とくに多くなります。そういう地方のまわりに、わりあいにつめたいたい空気におおわれた地方があると、あたたかい空気がのぼっていくあとへ、入れかわりに、そのつめたいたい空気が下からふきこんできて、大きなうずができます。そうして、ひょうが降ったり、かみなりが鳴ったりします。

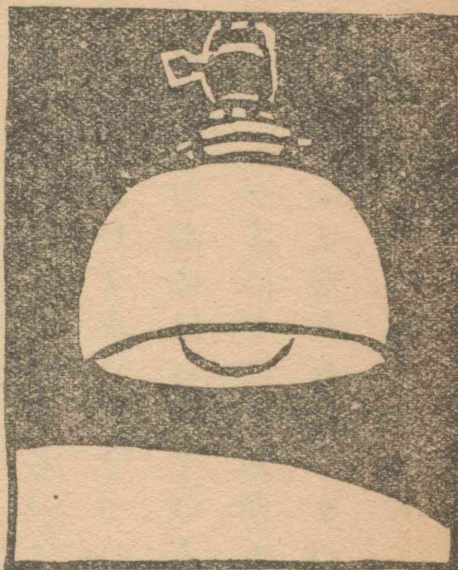


これは、茶わんのばあいにくらべると、しくみがずっと大きくて、うずの高さも、四キロとか八キロとかいうのですから、そういう、いろいろなかかわったことがおこるのです。しかしまた、見かたによつては、茶わんの湯と、こうしたら雨のばあいは、よほどよくにたものと思つてさしつかえありません。

もつとも、らい雨のできかたは、いまいったようなばあいはかりでなく、だいぶようすのちがったのもあります。だから、どれもこれもみんな、茶わんの湯にくらべるのはむりですが、ただ、ちよつと見ただけは、まったく関係のないようなことがらがある。原理のうえからは、おたがいによくにたものであるという一つの例に、らい雨をあげてみたのです。

湯げのお話はこのくらいにして、こんどは、湯のほうを見ることにしましょう。

白い茶わんにはいつている湯は、日かげで見れば、べつにかわつたようすはなにもありませんが、それを日なたへ持ちだして、じかに日光をあて、茶わんのそこをよく見てごらん下さい。そこには、みょうなゆらゆらした光った線や、うす暗い線が、



すから、よく見てごらん下さい。それも、お湯が熱いほど、もようがはつきりします。

つぎに、茶わんのお湯がだんだんにひえるのは、湯の表面の茶わんのまわりから、熱がにげるためだと思っていいたいのです。もし、表面にちゃんとふたでもしておけば、ひやされるのは、おもに、まわりの茶わんにふれた部分だけになります。そうな

ると、茶わんに接したところでは、湯は、ひえて重くなり、下の方へ流れて、その方へ向かって動きます。その反対に、茶わんのまん中の方では、ぎやくに上の方へのぼって、表面から外がわに向かつて流れます。だいたい、そういうふうなじゅんかんがおこります。よく理科の本などにある、ビーカーのそこをアルコールランプで熱したときの水の流れと、同じようなものになるわけです。これは、湯の中にかんではいる小さな糸くずなどの動くのを見ていても、いくらかわかるはずですが、

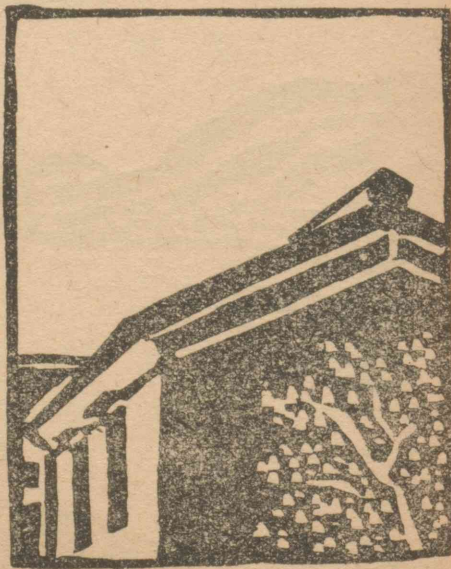
しかし、茶わんの湯を、ふたをしなしておいたばかりには、湯は表面からもひえます。そうして、そのひえかたがどこも同じではないので、ところどころ特別につめたいむらができます。そういう部分からは、ひえた水が下へおり、そのまわりの、わ

りあいに熱い表面の水が、そのあとへ向かって流れ、それが、おりた水のあとへとどくじぶんにはひえて、そこからおります。こんなふうにして、湯の表面には、水のおりているところ、のぼっているところとがほうぼうにできます。したがって、湯の、中までも熱いところと、わりあいにぬるいところとが、いろいろに入りみだれてできてきます。これに日光をあてると、熱いところとつめたいところとのさかいで、光が曲がるために、その光が同じようにならず、むらになって、茶わんのそこを照らします。そのために、さきにいっようなもようが見えるのです。

日のあたっているかべや屋根をすかして見ると、ちらちらしたものが見えることがあります。あの「かげろう」がたつのは、か

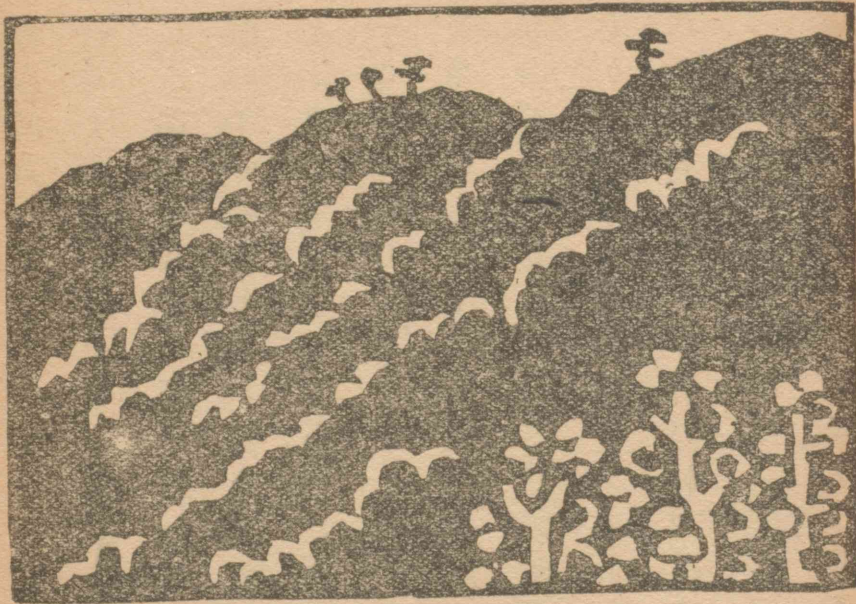
べや屋根が熱せられると、それに接した空気がふくれてのぼる、そのときできる氣流のむらが、光をおり曲げるためなのです。

つきには、熱い茶わんの湯の表面を、日光にすかして見ると、湯のおもてに、にじの色のついた、きりのようなものがひと皮かぶさっており、それが、ちようどさけめのようにたて横にやぶれて、そこだけがどう明に見えます。このふしぎなもようがなんであるかということは、まだ、あまりよくわかっていないようです。しかし、それも、前の温度のむらとなにか関係があることだけはたしかでしよう。



湯がひえるときにできる、熱
 さとつめたさとのむらがあるが、どう
 なるかということだけは、ただ、茶
 わんのときだけの問題ではなく、
 たとえば、湖や海の水が、冬に
 なって、表面からひえていくと
 きには、どんな流れがおこるか
 というようなことにも関係して
 きます。そうになると、いろいろ
 の実用上の問題とえんがつな
 がってきます。

地面の空気が、日光のために



あたためられてできるときのむ
 らは、飛行家にとって、たいへ
 んあぶないものです。とつ風と
 いうものがそれです。たとえば、
 森と畑とのさかいのようなどこ
 ろですと、畑のほうが、森よりも、
 日光のためによけいあたためら
 れるので、畑では空気がのぼり、
 森ではくだっています。それで、
 畑の上からとんできて、森の上
 へかかると、飛行機は、しぜん
 と下の方へおしおろされるかた

むきがあります。これがあまりはげしくなると、きけんになるのです。これと同じような氣流のじゅんかんが、もっと大じかけに、陸地と海との間に行われております。それは、海陸風とよばれているもので、晝間は海から陸へ、夜は反対に陸から海へとふきます。すこし高いところでは、反対の風がふいています。これと同じようなことが、山腹と谷との間にあって、山谷風と名づけられています。これが、もうひとまわり大じかけになって、たとえば、アジア大陸と太平洋との間におこると、それがいわゆる季節風(モンスーン)で、われわれが冬期に受ける北西の風と、夏季の南がかつた風になるのです。

茶わんの湯のお話は、すればまだいくらでもありますが、ここでは、これくらいにしておきましょう。

八 木もと竹うら

(一)

私が、木を割ったり、竹を割ったりして、なにかこしらえようとしていると、祖父が来て、「木もと竹うら」ということわざを教えてくださいました。

この簡単なことわざは、木を割るときには、もとのほうから割るがいい、竹を割るときには、うらのほうから割るがいいという教えてくださいました。

私はすぐにこれをためしてみましたが、ほんとうにそのとおりでした。竹を割るとき、もとのほうから割ろうとすると、た

とい、はじめにまん中になたをいれても、きつと、どちゅうから横の方へそれてしまつて、一方は太く、一方は細くなつて、まっすぐに割ることができなかつたのに、うらのほう、いいかえると、竹の先のほうから割ってみると、もとまで、きれいにまっすぐに割ることができました。そののち、氣をつけて、おけ屋さんなどのやっていると、ころを見ると、はじめ、うらのほうをかるく四



つに割つて、あとは、十文字の小さな木ぎれをはさんで、チョンチョンとたたいて、みごとに割っていました。

木のほうは、これと反対に、もとのほうを上にして、上からはものをうちこむと、まっすぐに割れて、けっしてそれることがありません。ただ、困るのは、木のばあいには、どっちがうらかもとか、わからないことでした。

そのことを友だちに話すと、
「水になげこんでごらん。しずむほうがもとだよ。」
と教えてくれました。

「木もと竹うら」という簡単なことを、知っているのといないのは、たいへんちがいます。これは、ちようど、「二二が四」という算数の九九と、にたようなものだと思います。

いったい、だれが、そのことを発見したのでしょうか。こと
 によると、なん百年という前からつくられて、子に、まごにと
 傳えたことではないかと思ひます。または、自分たちの祖先が
 発見したのではなく、よその民族から教えられて、それからい
 い傳えられているのもあるかもしれません。
 それは、なん回もなん回も、あるいは、なん代もなん代もやっ
 てみた結果、とうとう一つの眞理だと思われたので、そのこと
 をほかの人々に傳えるうちに、あのような、短くて調子のいい、
 氣のきいたものになつたものとも考えられます。

(二)

あぶはちとらず。

石の上にも三年。

一事が万事。

牛を追う。

うり二つ。

おびに短し、たすきに長し。

かべに耳あり。

ころばぬさきのつえ。

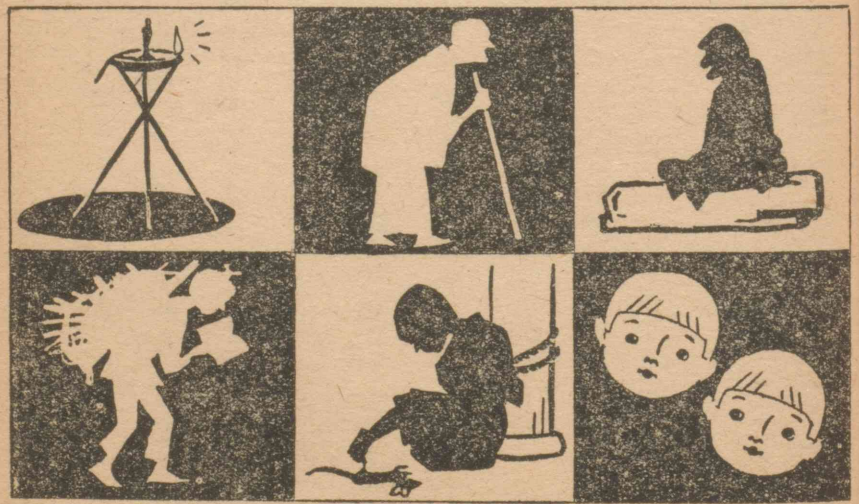
さるも木から落ちる。

親しきなかにも礼儀あり。

しゆにまじわれれば赤くなる。

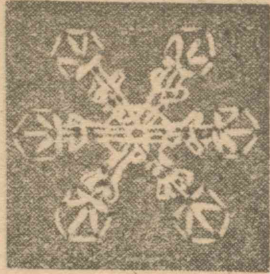
十人十色。

すきこそものじょうずなれ。



たまみがかざれば光なし。
ちりもつもれば山となる。
燈台もと暗し。
どんぐりのせいくらべ。
なくて七くせ。
二階から目ぐすり。
ぬかにくぎ。
ぼろを着ても心はにしき。
まかぬ種ははえぬ。
三つ子のたましい百まで。
世の中は、三日見ぬまのさくらかな。

九 雪の映画

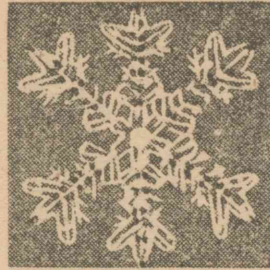


雪の映画を二つ見た。一つは「雪國」というのであり、もう一つは「雪」というのであった。

「雪國」は、北國の人たちが雪と戦っているようすを、映画にしたものである。雪が降りだしてから、だんだんつもるようす、深い雪の中で生活している人々、春の光がさしそめて、雪どけ水が流れたすところ、それをうれしそうに見ている雪國の子どもなど、時間的に、じゅんじよをおって、とりあつかったものである。

「雪」というのは、雪の景色を写したのではなく、雪の一ひら

をとらえて映画にしたものである。ただ一ひらの雪ではあるが、よく見ると、まことにきれいな形をしていること、しかも、一ひら一ひらの雪が、それぞれちがったけっしようにしていること、その美しい雪が数かぎりなく、天上から地上へ降ってくることなどを写している。



また、どうして雪のけっしうがでできるか、どんなばあいにも、どのようなけっしうになるか、空中の温度の変化、風の関係、水蒸氣の量、高度など、さまざまな条件によって、雪のけっしうがちがうわけを、映画的的手法によって、よくわかるようにしくんだものであった。

空から降ってきた雪の一ひらを受けとって、それをくわしく観察してみると、その雪が、どこで、どのようにしてできたか、どんな天空を旅して降ってきたか、おのずから知ることができるといのである。

「雪は、空からのお手紙です。」

こんなことばによって、映画は私たちに説明してくれた。一ひらの雪によって、はるかに高い天空のようすが、こまごまとわかるとすれば、たしかに空からの手紙にちがいない。「空からのお手紙」とは、うまくいったものだ。

このように、二つの映画は、どちらも雪にえんのあるものであるが、私はあとのほうの映画に心をひかれた。ふんだんに降ってくる雪の中から、一ひらの雪をとらえて、それをいろいろ

ろな角度からながめてみることは、つつましい心なしにはできるものではない。野原の中で、一本の草花を見いだして、それをたんねんに写生するのも、一びきのこん虫をながねんかかって調べるのも、ごくささいな感情をひろいあげて、一首の歌をよむのも、同じ心の現われである。

「雪國」の映画も、けっしてわるいものとは思わないが、いますこしふかく考えれば、さらにもしろい場面が発見されるように思われる。たとえば、ふぶきなどもその一つである。風にあおられた雪のむれが、道を消し、木をおり、汽車を立ちおうじょうさせ、人をたおし、こごえ死にさせてしまうことすらある。このものすごいありさまを映画化することは、たやすいことではあるまいが、ばんそうの音楽や、場面の組みあわせと説明の



ことばなどによって、かなり生き生きと表現することができそうである。

ふぶきのやんだあとの、雪の野原の表情をあつかっても、おもしろいと思う。一面の銀世界となった広い野原を、第一の人が歩いて行く。その人の足あとをしるべに、第二の人が歩いて行く。やがて第三の人も通り、第四、第五の人も、同じ足あとをたよりに通って行く。ぼつりぼ

つりとしるした足あとが、廣野を横ぎる一すじの道となる。その一すじの道をながめると、一直線ではなく、くねくねとゆがんでいる。歩く人は、おそらく、まっすぐに歩こうと思ったのであろうが、いつのまにか曲がってしまう。どうしてこんな曲がるのか。風にふかれたからであらうか。足がつめたくなつて、立ちどまったためであらうか。それとも、心の中で考えごとをしていて、思わず方向がちがったものであらうか。



雪國でいちばん楽しいものは、なんといっても、春さきの雪どけごろである。半年も雪にとざされていた地上に、ぼちっと黒

い土が見えはじめたときの喜びは、たどえようがない。子どもたちは、この黒い土の上に集まって、足でトントンとふんてみたり、しゃがんで土のおいをかいだり、てのひらでなでてみたり、耳を地べたに近づけて、なにかもの音でも聞こうとしたりする。こんな場面を、映画独特の手法によって、おもしろく編集できないだろうか。

同じ題の作文でも、それをとりあつかう人によって、文章は、どのようにも書きあらわされる。

どのような文章でも、読む人の心がひかれるのは、ものごとをあたたかくながめた人によって書かれた文である。

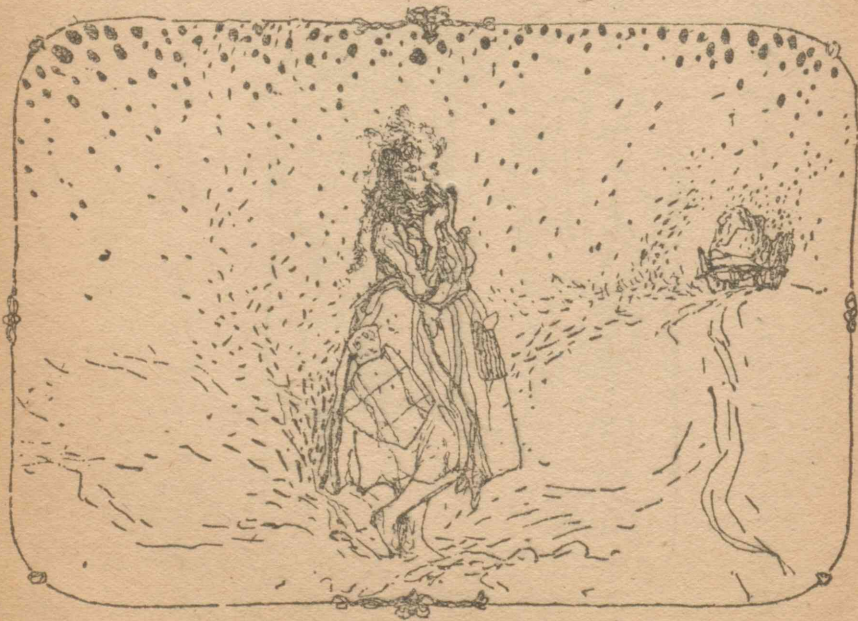
十 マツチ賣りのむすめ

雪はひっきりなしに降ってくる。寒いことも寒い、また暗さも暗かった。

「なんと暗い、寒い夜だろう。」
と、小さなマツチ賣りの女の子は、町をあちらこちら歩きながら思った。

女の子は、つめたい屋根うらのへやを出たときは、上ぐつを足にひっかけていた。その上ぐつは、母親のものだったので、この子にとっては大きすぎた。二台の荷馬車が来たので、それをさけるために、急いで道を横ぎったときに、その上ぐつはぬ

げてしまった。かたほうはどこへいったか、つい見いだせなかった。もう一つのほうは、どこかの男の子がひろって行ってしまった。その男の子は、これは人形のゆりかごにはもってこいだと思ったのであろう。
そこで、その女の子は、まったくはだしになってしまった。だから、その足のつめたいことといったらなかつた。自分の足だか、ひとの足だか、わからな



いくらいだった。寒さがしみこんで、足は赤く、青くなつていた。

おおみそかの晩だというのに、その子は、まだマッチをすこしも賣つてはいなかつた。一はこも賣つてはいなかつた。思ひきつて、その屋根うらの家へ帰ることもできなかつた。まだ一銭ももうけてはいないので、父親が、きつとひどくしかるにきまつていた。

かわいそうに、その子は、おなかがすいて、こごえて、身をひきずつて歩いていった。



その子のきれいなかみの毛は、両かたにまつわりつき、雪は、そのかなしげな、小さな顔のまわりを、花かんむりのようにくまどつた。けれども、その小さなマッチ賣りのむすめは、自分のまき毛のことも、雪のことも考えなかつた。美しく火のともつた家々の前を、そろそろとかなしげに通つて行きながら、その小さなマッチ賣りのむすめの考えたことはそれであつた。

女の子は、窓々をとおして、ちらちらとかがやくともしびの光を見た。おいしそうなにおいをかいた。「あれはやき鳥だろうか。ひもじいので、そんなことを思った。ただひと目でも、火の光とごちそうとを見るだけでも、満足したのであるう。

女の子は、手にマッチの小さなたばを一つ持っていた。ぼろぼろの前だれの中には、もつとたくさんはいつていた。女の子

は、どんなにか、それで火をと
もしてみたかったことだろう。

女の子は、二つの家の間に、
ちよつとした、身をかくす場所
を見つけた。そうして、そこに
すわりこんだ。女の子は、両足
を——そのあわれな、小さな、赤く、青くなつた両足をそろえ
て、ぼろぼろの着物の下で重ねて、どうかして、あたためよう
とした。けれどもだめであつた。

両手もまた、寒さでほとんどごえていた。その両手をあた
ためるために、一本のマッチで——ほんのたった一本のマッチ
で、火をとすことができたならば、どんなによからうか。



女の子は一本のマッチをとりだした。かべにこすりつけて、
火をつけた。まあ、なんといううれしいことだろう。明かるい、
赤いほのおがかがやきだした。女の子は、その上へ、小さなつ
めたい両手をさしのべた。

その小さなほのおが、その子には、もえさかる大きなほのお
のように思われた。これは、ま法のマッチだろうかとさえ思っ
た。

そればかりではない。それが
もえ続けている間、大きなろの
前にすわっていた。そのろの中
には、美しい火がもえあがり、
ほのおは、その小さなマッチ費



りのむすめを喜びむかえるようにおどりあがった。

女の子は、小さな、つめたい足を、かがやくほのおの方へ
ばした。と思うと、そのとき、ほのおは消えてしまい、ろはな
くなつてしまった。女の子は、手にもえつくしたマツチを持っ
て、つめたく、いん氣そうにすわっていた。女の子は、またそ
うしないではいられなくなつて、もう一本のマツチをとつてか
べでこずった。

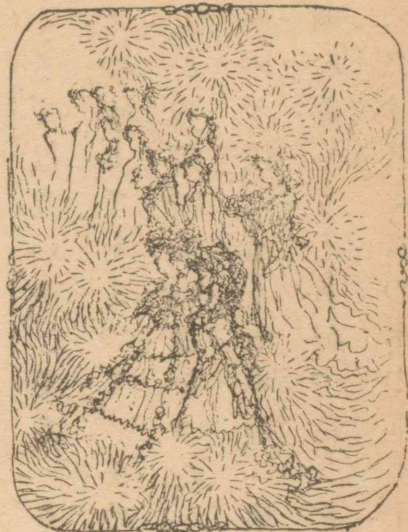
それがゆらゆらともえあがると、まあ、なんというふしぎな
ことだろう。その火の光のさすところは、かべがきぬのように
うすくなつて、その女の子は、中のへやをすつかり見とおすこ
とができた。

雪のようにまっ白なぬのをかけ、びかびか光るさらをならべ

たテーブルが見えた。やいた鳥が——それこそほんとうのまる
やきの鳥が、ほかほかとあたたかいいきをたてて、テーブルの
一方におかれてあつた。

そのとき、まあ、どうだろう。そのやいた鳥は、肉を切るナ
イフとホークとをせなかに立てたまま、テーブルからとびおり
て、ゆかの上をよたよた歩いて、その女の子の方へずつとよつ
てくるではないか。ああ、そのときもとき、ちやうどマツチは
もえつくしてしまつて、女の子のそばには、あつい、かたいか
べしかのこつていなかつた。

女の子は、もう一本の、第三番めのマツチをすつた。ほのお
が明かるくもえあがつた。そうして、こんどは、女の子は、一
本のクリスマス木の下にすわっていた。いかにも大きな木で、



のむすめを見てわらいかけた。女の子は、人形の方へ両手をさしのべた。と、そのとき、マツチはもえつくしてしまった。けれども、やっぱり、そのたくさんのろうそくはもえ続けていて、それが、高く、高く、しだいにのぼって、大空の星のようにかがやくのを見た。たしかにそれは星であった。
「かがやく小さな星よ、おまえはいったいなんだろうか。」

女の子はねむそうにつぶやいた。

じっと見つめているうちに、一つの明かるい星が落ちるのを見た。その星が落ちるとき、空を横ぎって長い光のおをひいた。「なにかが、神さまのところへ行くのだ。」と、女の子は思った。この子にとって、ただひとりやしんせつな人であったおばあさんが、星の落ちるときは、なにかのたましいが神さまのところへのぼっていくのだと、話してきかせたことがあった。

女の子は、またもう一本のマツチを、そばのたばの中からひきだした。そのマツチの火の中で、もうとつくにわかれて神さまの



おそばへ行つたおばあさんを見た。おばあさんは、いつものように、やさしく、しんせつなようすをしていた。けれども、前よりはもっと楽しそうなようすをしていた。

「おばあちゃん、わたしのおばあちゃん。もう行っちゃいや。」と、女の子は、声をあげた。そうして、おばあさんが見えなくなつては困ると思つたので、急いで、たばの中にあつたマツチをみんな一時につけた。

「いっしょにつれて行つてください。ねえ、いっしょにつれて行つてください。」

と、女の子はいっしょうけんめいにたのんだ。

マツチは、はなやかにもえあがつた。まっ晝間でも、それ以上には明かるくはないと思われくらいであつた。

おばあさんが、こんなにせいが高く、りっぱで、美しく、そうして、しんせつに見えたことは、いままでなかつたことであつた。

おばあさんは、女の子をうでにかかえて、ふたりは、いっしょにふわりとまいあがつた。うれしそうに、楽しそうに、上の方へ、地面から高くはなれて、もう、寒さも、ひもじさも、なみだもない國へ、上の方へと、



神さまのおそばへ行くかのようにのぼって行った。

小雪の降った元日の朝、人々が、マツチ賣りのむすめの、ひえきつた小さななきがらを見つけたとき、

「かわいそうな子だ。あの子は寒さでこごえ死んだのだ。」

といった。けれども、そうではなかった。人々は、女の子がお

おみそかの晩に見たふしぎなまぼろしを知らないのだ。人々は、

その子がどんなに幸福に、神さまの樂園の中で、元日をむかえ

ているかを知らないのだ。

純 (5)	典 (28)	引 (35)	規 (70)	條 (84)
直 (5)	宗 (32)	保 (45)	接 (71)	件 (84)
修 (5)	哲 (32)	險 (45)	割 (77)	独 (89)
職 (5)	系 (33)	張 (53)	儀 (81)	編 (89)
英 (18)	博 (34)	帶 (57)	映 (83)	
交 (24)	士 (34)	象 (62)	変 (84)	
辞 (28)	億 (34)	蒸 (63)	量 (84)	

○てつづんだ漢字は、「当用漢字別表」(教育漢字)にはいっていない漢字です。

國語 第六学年 中

Approved by Ministry of Education

(Date June 6, 1948)

昭和二十二年九月二十日翻刻印刷
昭和二十三年六月六日修正印刷
昭和二十三年六月二十五日修正印刷
(昭和二十三年六月六日 文部省検査済)

著作権所有

著作兼発行者

文

部

省

翻刻印刷者

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

代表者 長 得 一

印刷所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

発行所

東京都北区堀船町一丁目八五七番地
東京書籍株式会社

広島大学図書

0130449617

